# 第8回プラトーノフ学会に参加して

古川哲（聖心女子大学・非常勤講師）

本報告では2014年9月23日から25日にかけて開催された生誕115年記念第8回プラトーノフ国際学会（VIII Международная научная конференция, посвященная 115-летию со дня рождения А. П. Платонова）について、そしてそこで私が行った研究発表について述べる。学会の会場は23日と24日はゴーリキー記念世界文学研究所で、そして25日はゴーリキー記念文学大学だった。主催者は、これら二つの機関に加え、ヴォロネジ国立大学も加わった三者で構成されている。

まず、学会の基本的な趣旨を確認しておこう。本学会は1989年に第一回が開催された。これは、作家の『チェヴェングール』『土台穴』などの代表作の出版が実現してから、ほどない時期にあたる。1930年代初頭に主要な文芸誌から締め出されたプラトーノフの没後の再評価はソ連で1950年代末以来始まっていた。また、上にあげた二つの作品にしても、ソ連の国外では1970年代に出版されていた。それでも、ペレストロイカ期における情報公開は、ソ連内部においてプラトーノフの創作の広くは知られていなかった部分が公認されたことを意味した。このことは、それまでにソ連の内部と外部でそれぞれに発展してきたプラトーノフ研究が、統合される可能性をもたらした。

本国際学会は、1980年代半ば以降にプラトーノフ研究が直面した上記のような状況の変化に対して、組織的かつ積極的に対応してきた。学会の方向性を端的に表しているのは、世界文学研究所でのプラトーノフ研究を率いているコルニエンコ氏が開会式の際に述べた、プラトーノフ研究が「若い学問 молодая наука」であるという発言だ。これは、始まってから比較的日の浅いプラトーノフ研究に、多様な観点からの研究によって研究の厚みが備わっていくことが望ましいとの立場である。本学会の成果として刊行される論集『哲学者の国 Страна философов』（本稿執筆時点で７巻まで刊行されている）で、草稿に基づく実証的な論文と並んで、作品の解釈に重点をおいた、より思弁的な論文が収録されていること、そしてこの論集には学術的な校閲や注釈を施されたプラトーノフ作品が併載されることは、上記のコルニエンコ氏の立場を裏付けるものである。

ここで、今学会のプログラムを簡単に振り返ってみよう。

23日には、開会式、世界文学研究所で学会期間中に開催されたプラトーノフの作品を題材とする絵画の展覧会についての告知（『土台穴』に基づく版画、及び児童たちによる絵画）の後に、学術的な研究発表が開始された。その後、プラトーノフ作品が韓国語及びカタルーニャ語に外国語に翻訳されたことを受けて、それぞれの訳者が招待され、講演が行われた。

24日は研究発表が続いた、この日のプログラムの後半には二つの分科会（「テキストとコンテキスト」「テキスト、伝記、詩学」）が設定された。

25日は、研究発表の後、プラトーノフが住んでいた部屋の見学が行われた。会場の文学大学の一角に、プラトーノフが1951年に没するまで住んでいた部屋があるためである。その後、予定されていたラウンドテーブルに代えて、舞台俳優による短編『ポトゥダニ川』の朗読、プラトーノフの彫像を制作した彫刻家によるスピーチ、プラトーノフの伝記を『偉人伝』シリーズから出したアレクセイ・ワルラーモフによる講演などが行われた。

本学会の以上のような構成からは、上述のような本学会の基本的な方向性が、今回も踏襲されていることがわかる。さらに、研究発表にとどまらず文学以外のジャンルにおける創作も含めた、プラトーノフに関連する様々な文化的な営為を、総合的なかたちで参加者に提示しようとする主催者の意図が感じられた。

学会のプログラムに基づいて、参加者の構成についても述べておく。ただし、プログラムにはзаочное участие（報告送付のみの出席）と表示されている参加者も含まれている。さらに、プログラムにあらかじめ欠席の表示がない場合でも、実際には欠席する参加者もいる。そのような事情を念頭に置いて、本稿の記述を参照してほしい。報告者数は66人、参加者は10カ国から来ている。そのうちロシア国内からの報告者が51人と圧倒的に多く、ヨーロッパロシア、シベリア、極東から参加がみられる。欧米は、合衆国、イギリス、ベルギー、ドイツ、スウェーデンから、東アジアは日本、韓国から参加があった。日本から参加した野中進氏は、報告およびパネルの司会を行った。カザフスタンとウクライナからも参加があった（ただし、ウクライナからの参加者は「報告送付のみの出席」）。都市別にみれば、モスクワからの参加者が23人、それにヴォロネジからの参加者が8人であり、作家ゆかりの、ロシアの都市に研究者が多いことがわかる。

実際に参加したさいの印象としては、本学会の初期から参加しているハンス・ギュンター氏などのベテランの報告を聞くことができたことは貴重であった。またアメリカ合衆国から参加したナリマン・スカコフ氏など若い研究者の参加も見られた（筆者自身も、そうした若手に属する）。

私自身は、最終日の25日に研究発表を行った。発表の内容は、プラトーノフ作品における連続性とエボリューション（漸進的な変化）について論じるものである。『ロシア・東欧研究』に掲載した論文[1]を、日本の共同研究者からのコメントを踏まえてより整理し、さらに結論部分での議論を発展させ、今回の報告とした。発表後の質疑応答では、コルニエンコ氏、及び1920年代のプラトーノフ作品について著書のあるフリャシェワ氏から、質問やコメントを受けることができた。コルニエンコ氏からは、小説のみを取り上げた私の報告にたいしプラトーノフの社会批評も含めて作家の世界観の連続性を考察していくべきだという指摘を受けた。フリャシェワ氏からは、報告のなかで取り上げた中編小説『エーテルの道』のなかの

[1]古川哲、「『エーテルの道』から『ジャン』へ―1920～30 年代のプラトーノフ作品にみられる人間と自然の関係における変化をめぐって」、『ロシア・東欧研究』、ロシア・東欧学会、第 42 号、pp.103-120、2014.

報告では取り上げなかった箇所について報告者の考えをただす質問があった。私自身は、この作品の中には、人間から自然への一方的な働きかけが物理学者の研究という行為をとおして描かれていると主張した。それに対してフリャシェワ氏は、作中に描かれている微生物が「モンスター」のような様相を呈して現れる箇所は微生物から人間への働きかけではないのかと問うた。この問いに対して私は、そのように微生物が人間にたいして現れることは、「人間と自然の間に相互的な関係がないことの一つの側面」だと回答した。この私の回答は、報告で分析したもう一つの作品である『ジャン』で人間と自然との相互的な関係が成立しているとする私の主張を踏まえたものである。時間の制約があるなかで、やや伝わりにくい回答にとどまったかもしれないため、ロシア語による学術的なコミュニケーションの能力を向上させる必要を感じた。なお、コルニエンコ氏からは、懇親会の席で、本報告の、小さいが具体的な変化（микроэволюция）に焦点を合わせるアプローチについて、肯定的な評価を受けた。以上のような質疑から、私の主張が理解されたうえで批判されたという実感をもった。同時に、今後の私の研究の方向性について、貴重な示唆をうけることができた。さらに言えば、プラトーノフの専門家が集まる国際学会において私の議論が根本的に否定されることはなかったので、安堵できたと同時に強く励まされた。

末筆となりましたが、旅費を助成してくださった日本ロシア文学会に感謝申し上げます。

上：プラトーノフが住んでいた部屋。現在は文学大学の教室として使われている。

下：会場に展示されていたプラトーノフの訳書。